

捕虜の気持ち

今年1月アルジェリアで発生した衝撃的な日本人技術者誘拐、殺害事件の生々しい記憶の直後に、アラブで軍隊に捕まった体験を話してほしいという奇特な講演依頼をいただいた。以前イスラエルを訪れた時、ガイドからあなたには幸運が憑いていると妙な持ちあげられ方をした。アラブで軍隊やテロリストに捕まったら普通半死半生のリンチに遭い、生きた心地がしない筈ですと。

1967年のことだった。第三次中東戦争はイスラエルの電撃的な勝利のうちに終わり、敗れたアラブ諸国には戦禍が残り、国中に暗雲が漂っていた。そのアラブ国家のひとつ、ヨルダンでは軍の戒厳令が敷かれていた。その時私は戦渦の中にあった首都アンマン市内の小高い丘で、あっという間に十数名のヨルダン軍兵士に包囲され、身体にライフル銃を突きつけられ、身柄を拘束されてしまった。一瞬何が起こったかわからず、しばらくして身体中がわなわたと震えてきた。無様にも急所を掴まれ軍靴で砂を蹴りかけられ、ホールドアップの姿勢のまま背後から兵士にどつかれつつ、通りがかった市民がこわごわと見守る中を滞在中のホテルまで連行される羽目になった。

こわもての兵隊さんに囲まれ尋問の末、漸く怪しい人物ではないと分かってもらえて何とか身柄は解放された。その前年ベトナム戦争中のサイゴンで米兵に銃を向けられたり、スエズ運河で警察署に留置されたのに続く、若気の至りの大チョンボだった。ガイドの言う通り、ヨルダン軍に怪しいテロリストと疑われでもされたら、果たしていまこの世にいたことが出来ただろうか。

昨年捕われて45年の節目を迎え、改めて拘束現場を再検証するためひとり現地を訪れた。あれから半世紀近い時が経過し、当時交戦国だったイスラエルとヨルダン国境も出入国に問題はなく、シリアからの難民を除き臨戦ムードは感じられなかった。捕われの現場は、いまや住宅地と化し‘**This is the spot!**’と叫ぶべき場所は、残念ながら確認できなかった。当時の背筋が凍った臨場感だけが甦ってきた。得難い体験だったが、もうこんな生きた心地がしない恐怖はまっぴら御免だ！

(近藤節夫)